

日本の林業の復活が始まっている

10月28、29日の両日、18人が参加して群馬県沼田市と栃木県日光市の林業の現場を訪ね、その現状を見学した。初日は高崎駅に集合、最初の見学先は沼田市の沼田中学校。ここは2013年に校舎を木造で建て替えた学校だ。コの字型の校舎（中に中庭）は一階建て。広い廊下、教室も吹き抜けになっている。木のぬくもり、ゆったり感に感動。文科省のモデル事業として建てられた。ちなみにコンクリート造に比べ割高だが、解体費用を加えると木造の方が安くつくそうだ。



獣害対策の現場

続いて、増加する熊、鹿対策の現場を訪れた。杉や檜は戦後に植林されて、今が伐採期を迎えている。ところが熊や鹿による樹皮剥ぎ被害が多発している。その対策は1本1本にテープを巻くか網を掛けるしかない。人手を要する作業だ。森林官の説明の中で、猟友会に頼み猪を駆除してもらおうが、その猪は食べることができないという話があった。放射線量が高いからだ。福島原発事故による影響が群馬県の上奥まで及ぼしていることに改めて驚かされた。

その後、森林技術総合研修所・林業機械化センターを訪れた。日本の林業が競争力を持つようになったのは、機械化によるコスト削減効果が大きい。その機械化の最先端を担う人材育成を行うところだ。同センターはすでに山奥にあるが、そこから更にマイクロバスに乗り換え、木を切り倒して作ったばかりの狭い作業道を通り研修現場に向かう。もちろんガードレールなしだ。切った杉を4mごとにカットする作業を見せていただいた。伐採の機械化には限度があり、急勾配ではチェーンソーに頼らざるを得ないそうだ

センターに戻って質疑を行う。すでに日本の木材は、価格的には外材とさほど変わらないところまでできている。端材のチップ化、合板、集成材、さらには曲がった板を作るなど製材の技術や利用法が進んでいることも追い風となっているようだ。宿泊は老神温泉。ゆっくり温泉に浸かって一日の疲れをとり、翌日に備えた。

センターに戻って質疑を行う。すでに日本の木材は、価格的には外材とさほど変わらないところまでできている。端材のチップ化、合板、集成材、さらには曲がった板を作るなど製材の技術や利用法が進んでいることも追い風となっているようだ。宿泊は老神温泉。ゆっくり温泉に浸かって一日の疲れをとり、翌日に備えた。

今も続く足尾緑化

二日目は、足尾銅山跡へ。日本の近代化を支えた足尾銅山は、精錬所の横を流れる渡良瀬川を汚染、鉍毒被害による被害者と共に闘った田中正造で知られる。その精錬所の煙突の煙に含まれる亜硫酸ガスが、山頂方向に流れ山々の樹木を枯らしはげ山にしてしまった。その広さ1600hである。緑化に向けた本格的な植林は1957年ころから始まった。地元の女性達が山に



足尾の山を背景に

登

り、一本一本植えたという。

現場は土もなく酸性化した岩肌が露呈しているため、植林作業といっても、草の種、堆肥、稲わら、土で練った植生盤（職員が創案）をつくり、これを岩肌に置くところから始まる。草が生え、土が根付かないと植林はできないからだ。台風、強風などで植生盤が吹き飛ばされても、何度も何度も山に登り作業を続けたそう。今でもボランティアが中心になって植林は続いている。おかげで緑は増え、荒れた岩肌は少なくなった。多くの人の地道な作業の積み重ねで、山の緑が守られていることを実感して、足尾見学を終えた。（蜂谷隆）